

ネパール・カトマンズ医科大学

における現地調査

～今後の海外実習のために～

ネパール連邦民主共和国

2016年11月19日～11月25日



神戸大学大学院医学研究科

グローバルリーダー育成センター

中川 貴美子

【Introduction】

ネパールは南アジア、ヒマラヤ山脈中部にある国で、正称はネパール連邦民主共和国 **Federal Democratic Republic of Nepal** である。インドと中国（チベット自治区）に挟まれており、文化的にも歴史的にも両国から多大な影響を受けている。豊かな自然環境と多数の民族、言語、宗教、文化から成り立っており、言語はネパール語が国内で半数を占める民族により話されているが、他の言語を話す民族も多数存在している。

またネパールの識字率は深刻な社会問題のうちの一つであり、カースト制度や貧困などのさまざまな要因でネパール女性の識字率は人口の 44% という厳しい状況であり、識字率改善に力を注いでいる。民族は非常に多様であり、ヨーロッパ系インド人が人口の半数を占め、他にはチベット系、ビルマ系をはじめとする 30 以上の民族が共存している。これまでも、ネパール共産党毛沢東派やマデシ派（インド系少数民族）などの様々な政治、学生団体が各自の要求を主張するストライキを起こしてきた。ストライキは通称「バンダ」と呼ばれ、公共施設、交通手段は全てストップし、学校、町中の店舗なども全て休業となる。現在は沈静化しているが、「バンダ」が実施される場合は、数日前に政府から実施通告がある。



地図※ 1



地図※ 2

首都はカトマンズ。人口は約 170 万人。産業は農業を主としているが、エベレスト山をはじめとする世界に誇る高峰が世界から観光客を集めており、1990 年の民主化を機に急速に社会的成長を遂げている。また宗教もヒンドゥー教徒と仏教徒が共存し、見事な調和を保っている。町の各所や小さな店先でヒンドゥー教のシヴァ神や仏教の仏像が祭られており、カトマンズ市内の仏塔広場では、若い男女が楽しそうに過ごし、また人々が祈りを捧げる光景を目にした。老若男女にかかわらず、各々の宗教が日常に溢れている様子がうかがえた。現在、ネパールでは近代化が進みつつある中で、寺院、僧院、王宮、ストゥーパ(仏塔)などの歴史的建造物が佇み、現代も古き文化遺産が見事に継承され続けている。街中の赤いレンガ造りの美しい装飾の施された趣のある建物から、かつてのカトマンズ王国の面影がうかがえる。しかし 2015 年の地震による被害は甚大であり、今でも尚復旧作業が続いている状況である。



【カトマンズ医科大学、カトマンズ大学教育病院】

カトマンズ医科大学は、首都カトマンズのトリブバン国際空港より 5km 圏内にあり、車で約 20 分のシナモンゴルに位置する私立カレッジである。カトマンズ医科大学はヌワコット地区の基礎医学棟、シナモンゴル地区内の臨床医学棟の 2 つの施設から成り、シナモンゴルの敷地内に教育病院も併設されている。基礎医学棟近くにコミュニティホスピタルという地域に根ざした医療施設が整っており、双方の病院の総病床数は 900 になる。最も患者訪問数が多い夏の時期は 1 日の外来患者数は 850 にまで上る。そのため、医師不足が問題となっている。当カレッジはカトマンズ市内の大学の最も充実した医学カレッジの 1 つで、Medical Council of Nepal、Sri Lankan Medical Council、UK General Medical Council、Medical Council India により認可されている。

カトマンズでは衛生上の問題に起因する A 型肝炎、B 型肝炎、コレラ、マラリア、腸チフス、天然痘、赤痢、結核、破傷風、狂犬病など、日本ではあまり見かけないような稀な症例がまだある。しかし、感染症専門の病院が別にあるため、当カレッジでは感染症専門の診療科はない。カトマンズ中心部では、大気汚染が原因で呼吸器疾患を訴える患者も急増している。ネパールの平均寿命は、男性 67 歳、女性が 70 歳である。

毎年約 135 名の学生が MBBS（内科学士養成）プログラムに入学している。MBBS プログラムの医学教育期間には通常 5 年半～6 年、レジデント初期研修は 3 年、さらに専門医として 3 年の期間が充てられる。イギリスの影響を受けたこともあり、イギリスの医療教育制度に類似している。教育学習活動は学習教材も標準的な英語の教科書が使用され、授業も英語のみで行われている。

当カレッジは、スウェーデン、イギリス、インド、パキスタンからの外国人留学生も積極的に受け入れている。外国人留学生は申請すると Wifi、図書館の利用が可。外国人留学生は当大学が所有する学生寮に宿泊が可。



カトマンズ医科大学正面



病院内の受付



大学内の食堂



基礎医学棟

【学生寮】

シナモンゴルのカトマンズ医科大学から大学のシャトルバスで約 30 分ほどのヌワコット郡に学生寮がある。同じ敷地内に男子寮、女子寮と 2 つの建物の間に職員の寮もある。

各部屋は 1 人、もしくは 2 人部屋の非常に質素な作りの部屋で、各部屋にベッド、シャワー、トイレ、タンス、机が設けられている。シャワーのお湯は年中使用可。洗濯機、ランドリーのシステムがないため、洗濯は自分で行う必要がある。学生は門限が設けられており、20:00 が門限となっている。ただし、留学生は特別にスタッフに許可をとることが許されている。

食事は敷地内の食堂で朝、昼、晩と 3 度食事をとることができる。食事はベジタリアンの学生にも対応してお

り、内容は、インド料理、中華料理に近いものが多い。基本的にそれほど刺激のないスパイスを多用したカレー中心で野菜の炒めもの、チキンを使用したものなどが多い。ネパールのカレーは、インド料理のカレーほど辛さはなく、比較的日本人の舌に合うカレーである。



学生寮



学生寮の部屋の様子



ネパールの食事

【交通手段】

渡航初日は、前もって大学にフライト到着時刻を連絡しておき、大学からの送迎車をお願いすることをお勧めする。空港には、多くの客待ちや流しのタクシーが空港の到着口から出てくる客を待ち受けており、気軽に声をかけ、荷物を持つと言い、タクシーに誘われることがあるため、戸惑ってしまうかもしれないが毅然と断ること。黒のナンバーのついているタクシーは認可されたタクシーの印である。街中でタクシーを利用する場合は、必ず先に料金を確認すること。または、現地の方に交渉してもらうのが良い。

市内を循環するバス、長距離バスが市内のあちこちから出ているが、大変混雑し、特に通勤通学、帰宅時間前後の朝、夕方は渋滞する可能性があるためあまりお勧めできない。リキシャーは、2人乗りの後部座席がついた自転車。料金は最初に交渉して決めるシステムだが、なるべく一人では利用しないほうが良い。ネパールは日本に比べ、交通量が多く、また路上にも野犬が多い。比較的小となしくはあるが、狂犬病の可能性もあるので近づかないこと。滞在中も自動車、バイクなど容赦なしに追い越し運転をする光景を目にした。交通マナーは決して良いとは言えないため、特に路上を歩行する際は十分注意する必要がある。大学のスタッフから、先進国と比べると歩行者の死亡事故が多いと言われた。



カトマンズの街並み



市内バス



タクシー

【気候】

朝晩の気温差がかなり激しい。滞在中、日中は長袖のシャツ1枚でもちょうどよい気温で湿度も低く、過ごしやすかった。しかし日が落ちると極端に気温が下がるため、念のため防寒具を持参することをお勧めする。1年中1番暑い時期5月でも湿度が低く、エアコンが必要ではないほどで、かなり過ごしやすい。6月～9月は雨季でゲリラ豪雨など激しく雨が降ることもある。雨季の後9月～11月は最も過ごしやすい時期。ただし紫外線はかなりきついため、日焼け止めを持参することをお勧めする。カトマンズは盆地で、砂埃が舞うこともあり、深刻な大気汚染も懸念されている。場所によっては埃っぽい場合があるため、現地でもマスクを装着している人を

多く見かけた。マスクは日本の白いマスクと異なり、黒やカラフルなマスクも街角で販売している。

【生活】

現地の生水の飲用は絶対にお勧めできない。必ずミネラルウォーターをお勧めする。水不足ということもあり、大学や各家庭などでは貯水タンクを設けており、そこから水が供給されることもあるので、その場合は必ず沸騰させること。ポットや電気湯沸かし器などはカトマンズ市内のデパートや量販店などで簡単に手に入る。衛生面はまだ下水の設備が整っておらず、近国のバングラディッシュほどではないが、まだ発展途上国といった印象がある。

街中では、日本語を話せる人や、町でも日本語を頻繁に目にすることが多かった。親日国ということもあり、ネパール人は温厚な人々が多いということでは知られているが、繁華街の夜間の単独での外出や夜間のタクシー利用は避けるべき。

物価は為替にもよるが、大体1ネパールルピーが1円ほどで、物価も1Lのミネラルウォーターが30円ほど。カトマンズ市内、大学付近各所に両替所などがあるため、気軽に両替が出来る。しかし紙幣のみが両替可。日本ではネパールルピーの両替が不可のため、帰国の際はネパールルピーをUSドルに替えておくとう便利。日本から持参する電気器具を使用する場合は変圧器具が必要。(B、Cタイプの物)

前回訪問した際は、電力制限のため1日に計画停電時間が設けられていたため、突然停電することは、日常茶飯事だった。現在はその対処として、大学や病院などは発電機が設けられており、必要な電力が蓄えられているので長期の停電の心配はない。前回の今年1月の訪問では計画停電の真っ只中の滞在であった。新憲法の改定をめぐり、インド系少数民族との争いが発端でインド政府による物資、電力供給が滞ったためだった。しかしこの件に関しては、依然としてインド政府からは一切コメントが公表されていないようだ。こういったことからもうかがえるように、隣国でありながらインドとネパールは、お互いに様々な影響を受けながらも非常に複雑な位置関係にあると言える。



画像※3

【Conclusion】

世界中のあちこちでクーデター、テロ事件、内乱などにより政情不安定になる国々が多い中で、ネパールは親日家で温厚な国民性ということもあり、比較的治安もよく、海外での臨床研修を受けるには、最適な環境だと言える。

英語でのコミュニケーションに関しては日本より圧倒的に進んでいる。大学関係者でなくとも街中で英語が問題なく通じる。そのため、語学習得という点においても非常に良い学習環境である。私立、公立の学校によって、ネパール語、英語で教育を受けることに大きな差があるそうだが、私立の小学校では基本的に英語で授業が行わ

れ、ネパール語は家庭でのみしか使われないそう。カトマンズ医科大学でもすべて英語で授業が行われている。

カトマンズ医科大学では、学長、副学長がどちらも女性であることを始め、都心部での女性の社会的進出においては、インドネシア、タイなどと同様に、日本よりもずっと進んでいるように感じた。一方で、カトマンズ市街や郊外に行くと、巨大な水壺や荷台などを運んでいる高齢の女性労働者の数の多さに驚いた。カースト制度などによる女性に対する蔑視はまだ残っているようで、都心部と山岳地帯、郊外の地域の格差はまだまだ大きいのが現状のようだ。

滞在中、終始異文化体験を色濃く感じるがあった。挨拶は、相手を見ながら胸の前で両手を合わせ「ナマステ」というのが基本。これは何となく慣れれば問題はないのだが、インドやバングラデッシュと同様、「Yes」「Sure」という意味で、ネパール人は器用に俊敏に首を傾げるのだ。初めての場合は戸惑ってしまう。同意するジェスチャーをする際、日本人はうなずき、首をたてに振るのが通常だが、このジェスチャーはいつまで経っても非常に新鮮であった。滞在中笑顔で首を傾げるジェスチャーを見かけると思わず笑みがこぼれてしまった。

総じて、現代の日本では見ることのできない若者や高齢者のエネルギーの強さに滞在中終始刺激を受けた。上にも述べたように、ネパール・カトマンズ医科大学での派遣臨床研修は、衛生面など日本の生活とは大きく異なる点はあるが、多種多様な民族、異なる宗教間の相違を受け入れながらも様々な文化や歴史を肌で感じることの出来る素晴らしい臨床実習と思われる。私自身非常に多くの学びを頂いた。この機会を頂けたことに心から感謝の意を申し上げたい。

ありがとうございました。



引用：

地図※ 1

<http://www.ghalettrees.com/destinations.php>

地図※ 2

http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/q071_map_nepal.htm

画像※ 3

https://store.arukikata.co.jp/products/item_2576.html